

褐毛和種(高知系)の遺伝的能力の推移について

1. はじめに

家畜改良センターでは、肥育農家の同意が得られた枝肉情報等からなる和牛各品種のデータベースを管理・運営しており、褐毛和種(高知系)については、肉用牛枝肉情報全国データベース(以下、「枝肉DB」)を管理・運営しています。枝肉DBを構築するにあたり、肥育者情報、格付情報の調査・入力等については公益社団法人日本食肉格付協会が行い、肥育牛の子牛登記情報の入力等については公益社団法人全国和牛登録協会が行っています。

枝肉DBの目的の一つは、全国的な和牛の改良の動向を把握することであり、家畜改良センターでは、蓄積されたデータをもとに褐毛和種(高知系)の繁殖雌牛の遺伝的能力(育種価)を評価し、育種価の生年別の平均により示した遺伝的能力の推移についての情報を提供しています。

2. 評価方法

(1) 評価に用いたデータ

肉用牛改良増殖強化対策事業「優良種雄牛効率選抜・高度利用」で収集されたデータ(1988年6月～2009年12月と畜分)及び枝肉DBから収集されたデータ(2010年1月～2022年12月と畜分)を対象としています。これら事業で収集されたデータは肥育・と畜された牛の一部であり、全てのと畜された牛をカバーしているわけではありません。

・遺伝的パラメータの推定及び個体の育種価算出	7,144件
・血縁情報	12,604件

(2) 評価形質

評価した形質の観測値の平均等を表1に示しました。

表1. 各形質の観測値の平均及び標準偏差

形 質	データ数	平均 ± 標準偏差	最小値	最大値
日齢枝肉重量(kg/day)	7,144	0.508 ± 0.064	0.261	0.721
枝肉重量(kg)		440.5 ± 53.3	252.0	636.0
ロース芯面積(cm ²)		49.9 ± 7.2	28	82
バラの厚さ(cm)		7.51 ± 0.99	4	11.8
皮下脂肪厚(cm)		2.07 ± 0.73	0.1	5.5
歩留基準値		73.55 ± 1.29	68.8	78.2
BMS(No.)		3.83 ± 1.56	1	12
BCS(No.)		4.22 ± 0.64	2	7
しまり		2.79 ± 0.83	1	5
きめ		2.94 ± 0.83	1	5
と畜時月齢(参考)		28.6 ± 2.1	22.0	37.0

※ 日齢枝肉重量 = 枝肉重量 ÷ と畜日齢

(3) 遺伝的パラメータの推定

遺伝的パラメータは、REML 法(単形質アニマルモデル)により推定しました(表2)。

表2. 遺伝的パラメータの推定値

形質名	遺伝率	遺伝分散 (σ_a^2)	表型分散 ($\sigma_a^2 + \sigma_e^2$)
日齢枝肉重量(kg/day)	0.68	0.0026	0.0039
枝肉重量(kg)	0.68	1630.50	2383.38
ロース芯面積(cm ²)	0.60	29.66	49.25
バラの厚さ(cm)	0.51	0.45	0.88
皮下脂肪厚(cm)	0.68	0.40	0.58
歩留基準値	0.71	1.14	1.60
BMS(No.)	0.60	1.37	2.29
BCS(No.)	0.36	0.13	0.37
しまり	0.52	0.32	0.62
きめ	0.50	0.32	0.63

(4) 育種価の算出

個体の育種価は、上記パラメータを用いてBLUP法(単形質アニマルモデル)により算出し、2003年から2007年の間に生まれた繁殖雌牛(後代で枝肉成績を有するものが1頭以上存在する個体)の育種価の平均値を0(ゼロ: 遺伝ベース)として補正を行いました。なお、遺伝ベースは、過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値として、毎年変更しています。例として、ある個体の枝肉重量の育種価が+10kgであった場合、過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の平均的能力よりも遺伝的に10kg 優れていることを表しています。

枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する繁殖雌牛は3,536頭でした。

3. 育種価の生年別平均の推移について

育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれ、本資料においては、枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する繁殖雌牛の生年別の育種価平均により示しています(表3及び図1)。これは、改良の動向を示すだけでなく、種牛に求められる能力への時代のニーズも反映されています。また、近年におけるトレンドの大きな変動は、頭数が少ないことによる影響も含んでいます。

なお、生年当たりの種雄牛頭数が概ね1～3頭のみであったため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

表3. 繁殖雌牛の育種価の生年別平均

生年	頭数	日齢 枝肉重量 (kg/day)	枝肉重量 (kg)	ロース芯 面積 (cm ²)	バラの 厚さ (cm)	皮下 脂肪厚 (cm)	歩留 基準値	BMS (No.)	BCS (No.)	しまり	きめ
1990	154	-0.017	-12.319	-2.706	-0.527	-0.039	-0.524	-1.321	0.294	-0.622	-0.679
1991	158	-0.017	-9.767	-2.509	-0.442	-0.027	-0.473	-1.317	0.297	-0.601	-0.636
1992	96	-0.019	-12.929	-2.172	-0.494	-0.042	-0.417	-1.101	0.302	-0.563	-0.613
1993	116	-0.011	-6.338	-2.084	-0.431	0.006	-0.471	-0.965	0.236	-0.461	-0.501
1994	158	-0.009	-6.789	-1.635	-0.368	-0.084	-0.292	-0.748	0.126	-0.321	-0.346
1995	124	-0.012	-8.838	-2.434	-0.429	-0.045	-0.470	-0.683	0.129	-0.300	-0.331
1996	142	-0.014	-11.125	-1.661	-0.343	-0.193	-0.139	-0.335	0.068	-0.139	-0.173
1997	146	-0.005	-4.982	-1.592	-0.237	-0.104	-0.208	-0.310	0.072	-0.135	-0.160
1998	124	-0.009	-6.636	-1.215	-0.225	-0.110	-0.136	-0.187	0.046	-0.081	-0.087
1999	89	-0.009	-7.360	-1.605	-0.217	-0.112	-0.177	-0.209	0.071	-0.125	-0.140
2000	120	-0.009	-7.654	-1.214	-0.157	-0.093	-0.091	-0.148	0.019	-0.057	-0.053
2001	89	-0.002	-2.478	-0.254	-0.134	-0.098	0.010	-0.105	0.017	-0.050	-0.063
2002	69	-0.006	-4.490	0.066	-0.033	-0.077	0.107	0.200	-0.048	0.127	0.106
2003	66	-0.005	-4.861	-0.833	-0.039	-0.119	0.027	-0.015	0.021	-0.014	-0.015
2004	89	0.002	1.076	0.614	0.013	0.028	0.052	0.059	0.009	0.016	0.004
2005	56	-0.002	-0.391	0.489	0.000	-0.026	0.088	0.113	-0.028	0.039	0.047
2006	48	0.003	3.108	-0.436	0.013	0.116	-0.188	-0.050	-0.035	0.009	0.027
2007	36	0.002	2.715	-0.171	0.020	0.036	-0.065	-0.227	0.029	-0.085	-0.090
2008	37	-0.004	-4.032	0.886	-0.076	-0.138	0.244	-0.040	-0.044	0.025	0.001
2009	26	-0.002	-0.487	0.537	-0.053	-0.034	0.067	0.045	0.018	0.016	0.033
2010	24	-0.001	-2.268	0.626	0.038	-0.224	0.343	0.553	0.025	0.205	0.192
2011	28	-0.007	-7.739	-0.111	-0.015	-0.137	0.187	0.434	-0.033	0.154	0.139
2012	25	0.001	-0.873	3.059	0.081	-0.301	0.775	0.310	0.081	0.097	0.048
2013	40	0.001	-1.606	0.857	0.045	-0.145	0.299	0.479	-0.048	0.211	0.205
2014	25	0.014	10.802	0.959	0.148	-0.150	0.246	0.360	-0.034	0.151	0.097
2015	29	0.007	4.483	0.537	0.020	-0.024	0.075	0.292	-0.053	0.178	0.165
2016	26	0.005	0.093	1.122	-0.012	-0.121	0.273	0.427	-0.001	0.143	0.147
2017	19	-0.007	-5.859	-0.636	-0.290	-0.132	-0.099	-0.411	0.115	-0.173	-0.218

注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

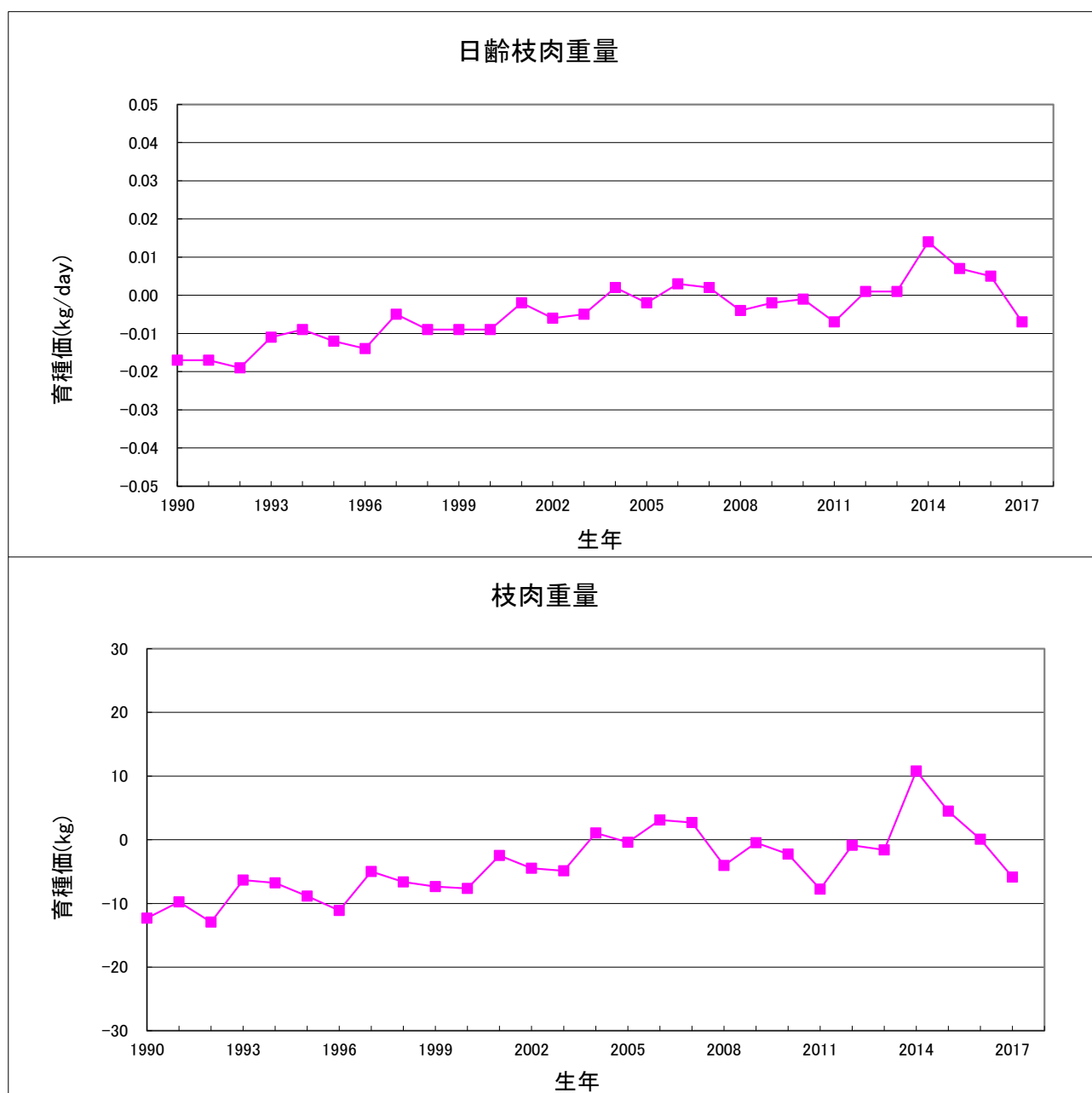
3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。例えば、2015年の繁殖雌牛の枝肉重量は約4kgと記載されていますが、2015年生まれの平均的な繁殖雌牛は、過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の平均的能力よりも、遺伝的に約4kg優れていることを表しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

図1. 繁殖雌牛の育種価の生年別平均



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

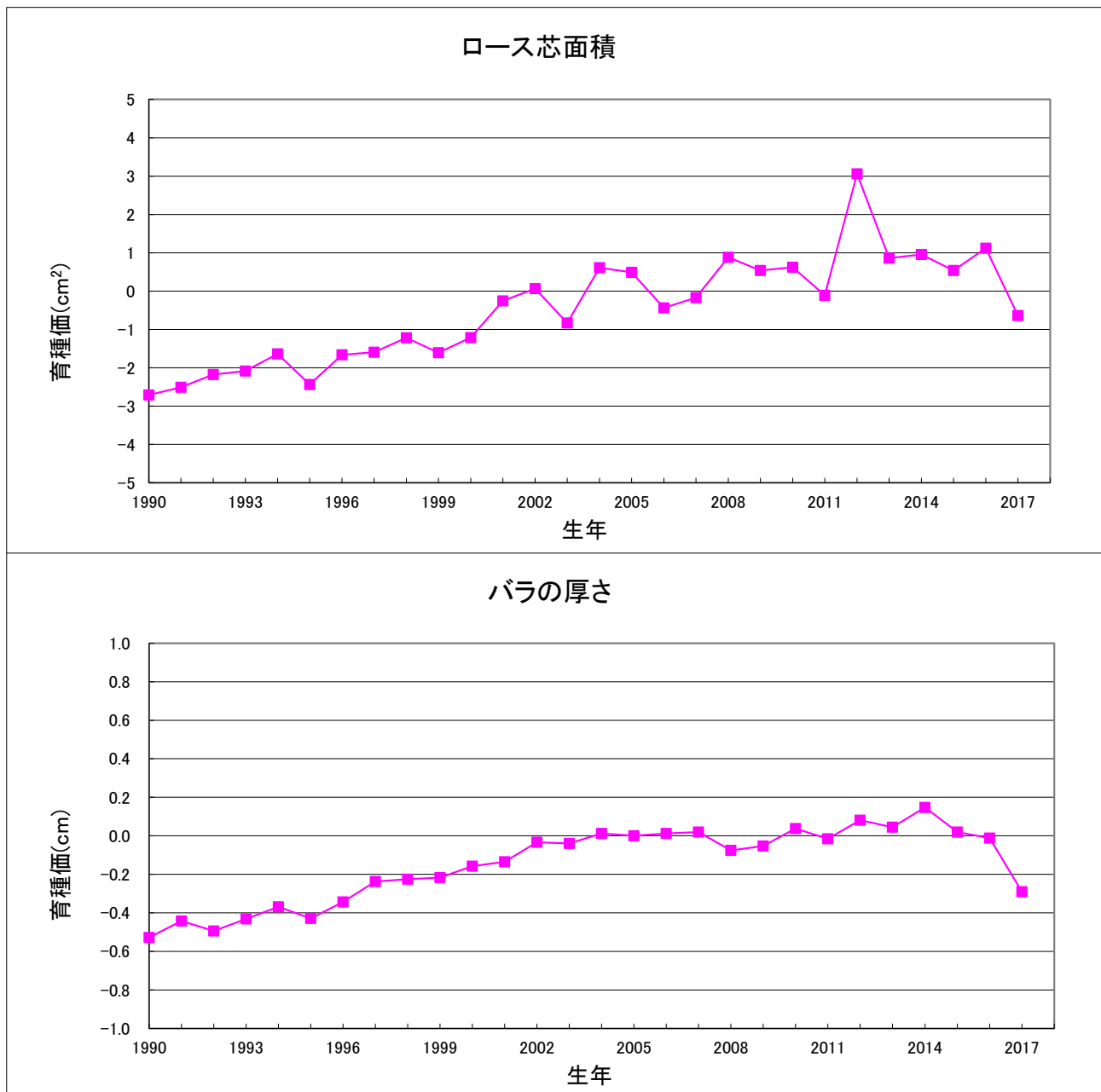
3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

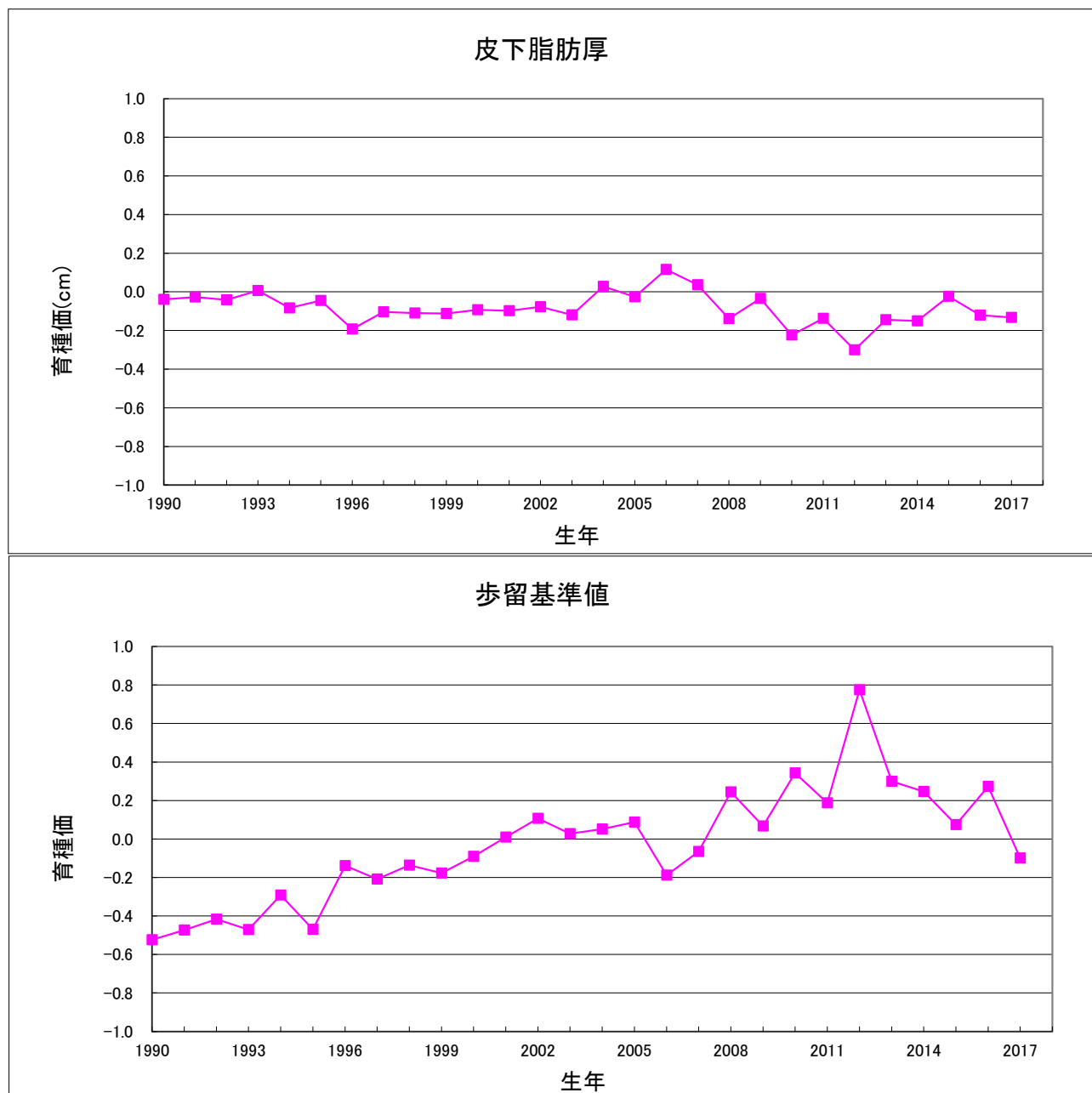
3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

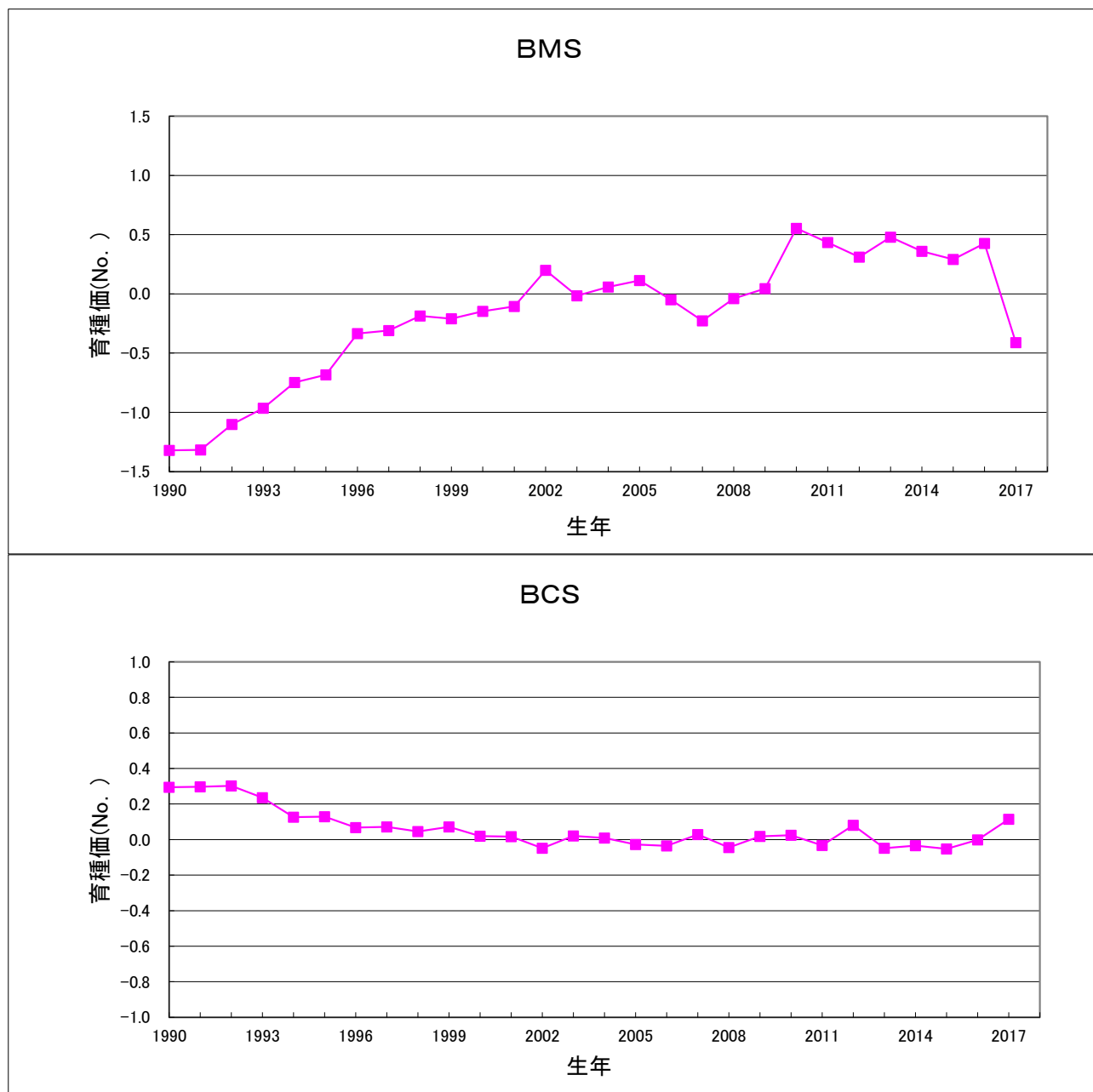
3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

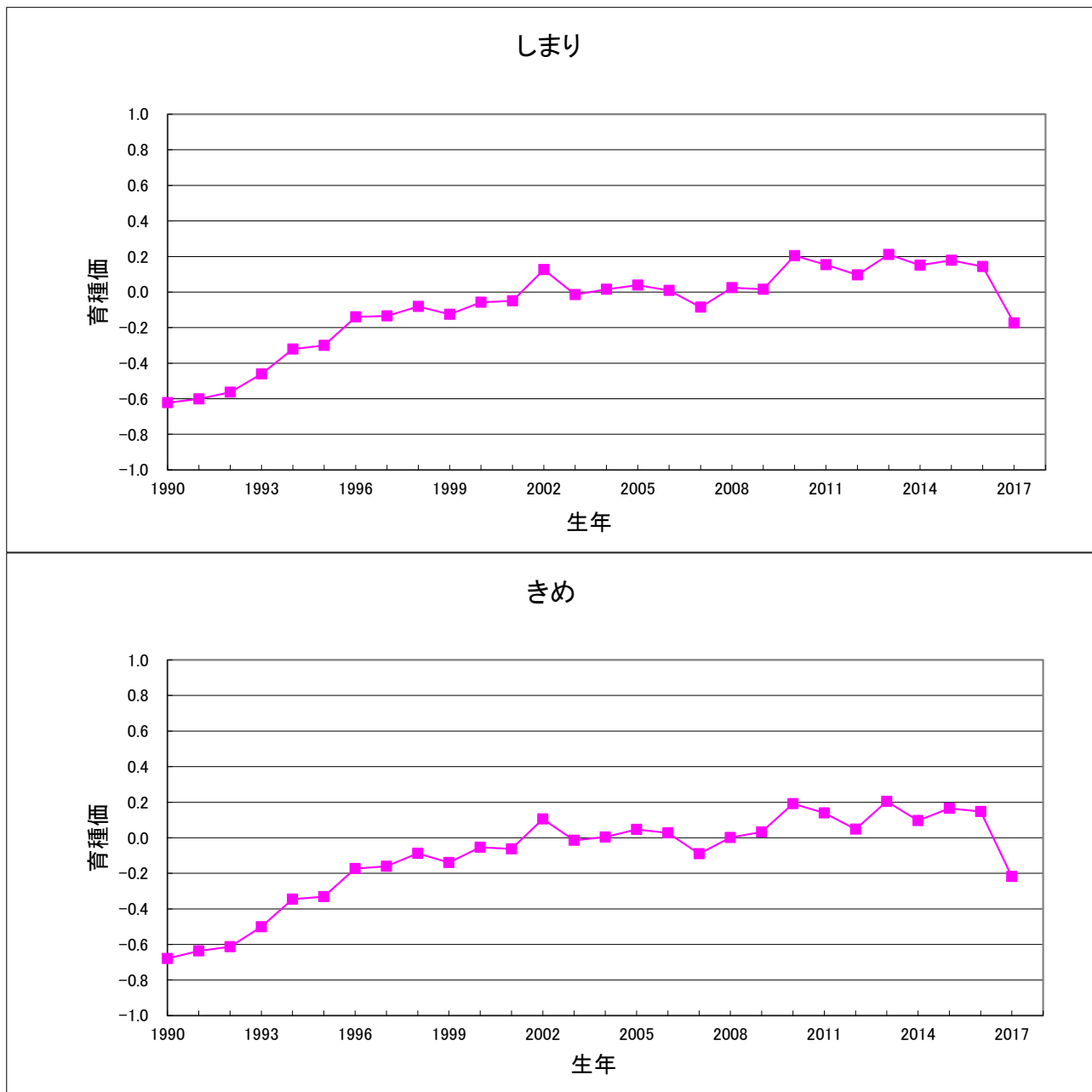
3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 生年当たりの種雄牛頭数が少ないため、種雄牛の遺伝的トレンドは示しておりません。

3) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

4) 育種価は過去20年前から15年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

5) 繁殖雌牛の後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

6) 近年におけるトレンドの大きな変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。